

KELES Newsletter

関西英語教育学会報 2008年度 第3号

事務局: 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4丁目698番1
大阪教育大学 英語教育講座 本田勝久研究室内
Tel & Fax: 072-978-3526 e-mail: honda@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
URL: <http://keles.hp.infoseek.co.jp/> 2008年9月25日発行

会長挨拶

教育のアカウントビリティーとKELESの役割

先の教育再生懇談会では、英語教育を抜本的に見直すための方策の一つとして、小・中・高・大の各段階の到達目標を立て、全ての段階で英語教育を強化することをあげています。具体的には、小学校から大学までの各段階における到達目標を、TOEIC、TOEFL、英検を活用して明確に設定すると同時に、英語教員の採用にも同じものを課す必要があり、同時に早急に学習指導要領を見直すべきとしました。また、新学習指導要領では、学力の重要な要素である基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成及び学習意欲の向上を図るために、授業時数増を図り、特に言語活動や理数教育を充実する必要があるとしました。その中で注目すべきは、実際の教育課程や指導方法の評価とそれに基づく改善を、すでに種々の業界で実践されている手法であるPDCA (Plan, Do, Check, Action) サイクルを導入し、計画から実行、検証、そして改善というプロセスをさらに次の計画につなげていく手続きをとることで、国民への教育のアカウントビリティーを明確に示すことが義務づけられた点でした。教員の免許更新制度もその一環と思われます。勿論教育の成果は長期的視野でみる必要があり、具体的な数字で示すことは困難ですが、今やコンプライアンスとともに教育界にも時代の波が押し寄せて来ております。

現状は、中学校・高等学校を通じて、コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力がない、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力がない、英語が大切で普段の生活や社会で役立つと考えている生徒は他教科に比べて多いのに対して、学年が進むにつれて英語が好きな生徒は減少すると厳しいようです(国立教育政策研究所)。そのためには、連語や慣用表現の意味と使い方、パラグラフ単位での書く訓練、事実関係の伝達や物事についての判断及び様々な意見についてコミュニケーションを図ることを指導する必要があり、具体的到達目標として、150WPMの標準的な英語を聞き取れる、与

えられたテーマについての1分間スピーチができる、300語の英文を読んで概要を把握できる、与えられたテーマについて短時間で5文程度のまとまりのある英文を書く、などの活動も提言(教育課程部会)されています。

このような状況に鑑み、学会としましては、NewsletterとHomepageで会員への有益な情報を遺漏なく迅速に伝え、紀要で研究発表と実践報告をしていただき、研究大会で意見交換と親睦の場を提供するという通常の活動に加えて、これまで以上に、地区セミナー(達人講師による英語力、授業力のハンズオンでの研修会)、卒論修論研究発表セミナー(次世代研究者・教育者の育成と院生ネットワークの構築)、全国英語教育学会との連携(第36回研究大会は大阪担当)を充実させてまいります。その結果、学会の活動が、教師の英語力、授業力のより一層の向上の一助となり、英語を学ぶ生徒の心を広げ、知性を刺激し、ひいては人間力をも高めることで、学会のアカウントビリティーがはたせると信じております。

吉田信介(関西大学)

第34回全国英語教育学会東京研究大会報告

第34回全国英語教育学会東京研究大会は、関東甲信越英語教育学会が担当地区となり、本年8月9日(土)・10日(日)に、昭和女子大学に於いて開催されました。今回の東京研究大会の発表数は210件にもものばり、9日の自由研究発表・実践報告では、急遽5番目の発表枠を設けることになったようです。今大会でも、発表当日に配布するハンドアウトの代わりに予稿集が作成されました。総頁数が515頁の大部の冊子となっていますが、各発表者の発表内容はA4用紙2枚にまとめられています。また、今大会の特徴として、各発表会場に司会者はつかず(タイムキーパーはつきます)、発表者が自分で発表時間を管理するという形態がとられました。新しい試みでしたが、発表・報告時間が20分、質疑応答が10分、計30分という自由研究発表・実践報告の時間がしっかりと守られていたように思います。

関西英語教育学会の会員の皆様も大会に多数参加され、研究発表者ならびに課題研究フォーラムの提案者として活躍されました。関西英語教育学会が担当する課題研究フォーラムでは、2年間の継続研究の1年目として、関西学院大学の門田修平先生をコーディネーターに、「多読を科学する：第二言語としての英語の学習における効用」と題して、活発な討議がなされました。フォーラムでは、神田みなみ先生(平成国際大学)、山崎朝子先生(武蔵工業大学)、野呂忠司先生(愛知学院大学)、白井恭弘先生(ピッツバーグ大学)がそれぞれパネリストとしてご提案され、およそ170名のフロアの皆様も熱心に耳を傾けておられました。詳細は次節の「課題研究フォーラム(KELES担当)報告」をご参照下さい。

会員の皆様の全てのご発表を紹介することができませんが、どの発表会場も盛況で、素晴らしい研究発表や実践報告が展開されていたものと思います。研究大会への参加が叶わなかった会員の皆様は、参加者の方々から情報を入手されたり、予稿集などで発表内容をご確認頂ければ幸いに存じます。会員の皆様の全てのご発表が、関西英語教育学会の研究教育活動の素晴らしさを物語るものであったことをご報告いたします。

大会の最後を飾るシンポジウムは、「日本の英語教育の将来 - 英語教育で育てたい『コミュニケーション能力』とは」と題して、九州英語教育学会の担当で行われました。英語教育が全人教育の一部として果たしうる「コミュニケーション能力の可能性」を模索して、小・中・高・大のそれぞれの立場から、コミュニケーションによる人間関係形成力の育成の必要性や、コミュニケーション能力の育成を目的とした外国語教育のグローバルスタンダードの視点が提案されました。

2001年度の広島研究大会から、全国英語教育学会は統一体として開催され、本年度の東京研究大会において各地区学会の持ち回りが一巡しました。再来年の2010年には、関西英語教育学会が第36回全国英語教育学会を担当することになります。会員の皆様と力を合わせ、大会を成功させるために最善を尽くして参ります。未筆ながら、関西英語教育学会と会員の皆様の今後のご発展とご活躍を祈念いたします。

本田勝久 (大阪教育大学)

第34回全国英語教育学会東京研究大会

「課題研究フォーラム(KELES担当)」報告

2008年8月に開催された第34回英語教育学会東京研究大会において、関西英語教育学会は「多読を科学する：第二言語としての英語の学習における効用」というテーマで、関西学院大学の門田修平先生をコーディネーターとして、課題研究フォーラム(2年間の継続研究の1年目)を企画・運営しました。その発表および提案内容を報告いたします。

【課題研究フォーラム - 2年間の継続研究の1年目】

・日時: 2008年8月9日(土)

・場所: 昭和女子大学 第13室(4S34教室)

・コーディネーター 門田修平先生(関西学院大学)

・提案者 神田みなみ先生(平成国際大学)

山崎朝子先生(武蔵工業大学)

野呂忠司先生(愛知学院大学)

白井恭弘先生(ピッツバーグ大学)

「はじめに：本フォーラムのめざすもの」

門田修平 (関西学院大学)

コーディネーターとして、まず本フォーラムのめざすものについて述べられた。今回は、第二言語習得におけるインプット、アウトプットの関係について検討する前提として、インプットの処理、特に多読について取り上げ、その目的、方法、効果について検討し、その上で第二言語習得におけるインプットとアウトプットの持つ意味について検討したいと宣言された。フォーラムにおける論点は次の3点であった。

1)多読は第二言語のaccuracyとfluencyの向上のいずれに役立つか？

2)多読は、もっぱらリーディング力を育成するものか、それとも英語のコミュニケーション能力全般に役立つか？

3)英語力の向上には多読によるインプットが保証されればそれで十分か、それともアウトプット活動が不可欠か？

報告者: 篠原みゆき (兵庫教育大学大学院)

「100万語多読 - 英語多読の長期継続」

神田みなみ (平成国際大学)

全体を通して「多読を続けることの大切さ」を説かれた。途中で辞書を引かない、授業中に多読の時間を取る、課題は最小限に、を多読授業の基本とし、読みやすさレベル0(絵だけの本から使用語彙250語レベル・総語数1500語程度まで)の非常に短い本から始めることを提案された。読みやすい本を大量に読むことで英語力が向上するということであったが、英米人用の絵本には、“tug of war”や“Let me have a go”などがあり、必ずしも簡単な表現ばかりではないと付け加えられた。

100万語を達成した学生についても言及され、彼らは読めなかった本が読めたという達成感を感じており、好みのシリーズの発見、教師や仲間の励まし、良好な読書環境(時間・本の保管場所)を味方につけたということであった。読書量(インプット)を増加し、読書レベルも上昇させたいところであるが、継続の難しさについても触れられ、授業時間内に多読時間を確保し続けることの重要性を強調された。

報告者: 篠原みゆき (兵庫教育大学大学院)

「多読指導の現状：科学研究の成果」

山崎朝子（武蔵工業大学）

小中高大を対象に行った多読実施状況アンケートと、多読授業を行った13大学の結果を発表された。多読実践形態は学校により様々であるが、小学校18%、中学校33%、高校71%、大学37%で実践されていた。小学校では読み聞かせ、中学校では時間不足による実践困難、高校では授業内外での実践、大学では個人レベルでの実施が多いという結果が報告された。

13大学による実践では、実践前後のテスト結果から全大学で有意差があったと報告された。学生へのアンケートでは、多読は良かったという反面、大変であるという意識も強かった。問題点として、学生の英語レベルと本の内容の面白さの不一致、目標ページ数設定の難しさ、意欲が低い学生にとっての90分間多読のきつさなどが報告された。多読は英語力を高めるが、実践が難しい点もある。多読に対する認識を深め、多読実践方法を構築し、カリキュラム全体の中で多読が考慮されるようにし向けていく必要があると締めくくられた。

報告者：篠原みゆき（兵庫教育大学大学院）

「中学・高校生に対する10分間多読の効果」

野呂忠司（愛知学院大学）

現在取り組まれている多読の現状について言及し、Day & Bamfordが提唱する多読アプローチ（読書中の辞書利用は回避・レベルに応じた読み物等）を基に、中高生を対象に取り組ませた「10分間多読」の研究について発表された。物理的な制約などから十分なinput（高校生10回、中学生7～9回実施）が行われていないものの、中高生ともに読解スピードに変化が見られ、読書量の多い生徒は読解力にも影響を及ぼしているという結果を報告された。フロアからの「多読において辞書を使わせないことや、不明な点についてはスキップさせた場合、〈気づき〉が失われぬのか」という問いに対し、個人のレベルに応じた読書教材が選定されていることが前提であることを踏まえ、「読み終わった後、辞書で調べさせる作業に取り組ませることも可能ではないか」と答えられた。また、「精読、多読、精読＋多読でどれが一番効果的か」という別の質問では、精読と多読を併用することが望ましいという考えを示された。

報告者：小川一美（関西医科大学）

「第二言語習得におけるインプットの効用」

白井恭弘（ピッツバーグ大学）

先の先生方が発表された多読アプローチとは少し異なる視点で、ご自身の研究や実践から得た第二言語習得に関する知見に基づき、英語学習の効用について発表された。はじめにKrashenやVanPattenなどのinput理論を概観し、その重要性を指摘された。

次にSwainが提唱するoutput理論について言及し、過去に取り組まれた実践に触れ、日本国内における第二言語の自動化のレベルアップを高めるために、outputにも取り組んでみてはどうかと提案された。フロアからの「input・outputのバランスをどのように取るのか」という質問に対し、outputに取り組む前提としてcomprehensible inputが十分に与えられていることが必須条件であると主張され、実践方法を詳しく説明された。授業に占める文法は自宅学習とし、listeningやreadingを中心に、多量のinput少量のoutputの順に授業を展開する必要があると指摘された。

報告者：小川一美（関西医科大学）

全体討議

始めに、参加者から寄せられた質問事項が取り上げられた。神田先生には語数の数え方について、山崎先生には多読授業実践前後に行うテストと多読評価方法について、野呂先生には多読、精読、多読と精読の混合のいずれが効果的か、白井先生には限られた時間数で多読、精読、文法、語彙をどう指導するか、input後にshadowingや音読をすることでoutputにつながるか、input量が多ければ、特にwritingやspeakingを行わなくても転移は起こるか、などの質問があり、それぞれの先生方が実践例を交えて分かりやすく解説され、また次の質問につながるという活発な質疑応答が展開された。

次に、参加者から寄せられた質問事項が取り上げられた。

白井先生には「限られた時間数で、多読、精読、文法、語彙をどう指導すればよいか」という質問があった。それに対し、授業でのインプットを増やす、精読と多読を併用する、production(特にspeaking)は強制しないと答えられた。直読直解のために高校1～2年は多読を取り入れ、文法力向上のための精読も行ってcomprehensible inputを増やすことが大切だと強調された。

山崎先生には多読前後のテストについての質問があったが、長短2種類のテストを紹介された。多読評価方法については、最低読書語数を指定して評価する方法が紹介され、虚偽の読書報告への対処については、読後報告時に個別に話すと本当に読んだかどうか分かるかと述べられた。

神田先生には語数の数え方についての質問がされ、それに対して関連の書籍を紹介された。

野呂先生には、多読、精読、多読と精読のいずれが効果的かという質問があった。お答えは多読と精読の併用であった。これまでの英語教育では、accuracyに関する知識(語彙・文法)ばかりで、processingやproductionをあまり行ってこなかったが、多読をすることで、言語処理が速くなり、その頻度を増すことで、言語定着が起こり、自動化力が向上する、また音声がいっしょに聞こえていけば、多読がlistening

にも転移するだろうと締めくくられた。

最後に門田先生から白井先生に、input後のshadowingや音読によってoutputにつながるか、という質問がされた。それに対して、音が入らない学習者には音声が入る状況を作るという意味で効果があるかもしれないが、音のみのshadowingはsemantic processingがないため言語の根本的対策にはならないと述べられ、聞いてから1~2秒遅らせてshadowingするという方法を提案された。inputとoutputの関係についても触れられ、大量input 少量output inputとすると、outputの過程でnoticing gapができて、次のinputに有効であると述べられた。また、書ける人は読んでいてもおっしゃり、comprehensible inputや暗記がL2データベース作りに繋がり、outputをすることでこの知識が自動化すると示唆された。

報告者: 篠原みゆき (兵庫教育大学大学院)

KELES第11回セミナー(大阪地区)報告

関西英語教育学会第11回セミナー(大阪地区)が2008年7月28日(日)に、大阪教育大学天王寺キャンパスにおいて開催されました。講師として、中嶋洋一先生(関西外国語大学)と金井友厚先生(大阪教育大学附属天王寺中・高等学校)をお招きし、活発なワークショップが行われました。また、中嶋先生と金井先生による「中学校、高等学校のより良い英語授業のために」と題した鼎談が行われました。当日は豪雨にもかかわらず、60名の方々が参加されました。

ワークショップ(1):

「生徒も先生もいきいきする授業をめざして」

講師: 金井友厚 (大阪教育大学
附属天王寺中・高等学校)

金井先生の本務校で長年実践されている英語弁論大会を素材として、良い英語の授業とは何かをスピーチ作成を通して考えるワークショップであった。

最初に行われたウォーム・アップの「1分間自己紹介」・「チャンツ」によって、会場はあたかも学校の教室のような雰囲気となった。次に、英語弁論大会の計画・準備から実施までの流れが資料に基づいて説明され、ビデオで生徒たちのスピーチがいくつか紹介された。このような実践報告の後、「良い英語の授業とは？」という問いがなされ、参加者はその答えを箇条書きにすることが求められた。次に続くタスク「価値のダイヤモンド・ランキング」では、先ほどの答えを「重要」から「重要でない」までの順位で示し、その理由を考えた。時間が足りないため最後まで進めることはできなかったが、続くタスクは今まで考えた内容をもとにスピーチを作成することであった。

本ワークショップは「良い英語の授業とは？」をあらためて考えなおす有意義な場となった。

報告者: 佐久正秀 (大阪信愛女学院短期大学)

ワークショップ(2):

「コミュニケーション能力を高めるディベート指導」

講師: 中嶋洋一 (関西外国語大学)

本ワークショップでは、ディベート指導の下準備から実際のディベートに至るまでの段について具体的に説明がなされた。参加者は、中嶋先生からの課題と発問に実際に取り組みながら、「コミュニケーション能力を高めるディベート指導」のアイデアと方法・秘訣を体験的に学ぶことができた。

コミュニケーション能力を高めるためには「負荷」のある徹底的な訓練が必要であり、そこでは教師は必要以上に説明したり教えたりすることを避けなければならぬと中嶋先生は説いた。教師が答えを与えてしまえば「負荷」のある訓練にはならず、もっと知りたい、質問したい、伝えたい、向上したいという生徒の気持ちは失われてしまう。大切なのは説明ではなく、課題や発問の質であって、それらが優れていれば「負荷」のある作業に生徒たちは楽しく取り組むことができる。そして実際に本ワークショップの参加者は中嶋先生の「授業」にワクワクしながら参加していたように思う。

報告者: 佐久正秀 (大阪信愛女学院短期大学)

鼎談:

「中学校、高等学校のより良い英語授業のために」

中嶋洋一 (関西外国語大学)

金井友厚 (大阪教育大学附属天王寺中・高等学校)

司会: 吉田晴世 (大阪教育大学)

ワークショップに引き続き中嶋先生、金井先生に対する参加者からの質問を中心とした鼎談が行なわれた。主な質問内容は、「中学生が興味を持つ題材や内容の取り入れ方」「教科書の本文訳」「定着を図るための家庭学習」「評価」「留学生や帰国子女の取り扱い」「経験に着目され実践されておられる理由」「求められる教員とは」など多岐にわたったが、一つ一つ自らのご経験や実践に基づいて丁寧かつ的確にお答え頂き、フロアとの議論も活発になされた。

中嶋先生からは、「教師の評価観が変われば評価も指導も変わる。どのような生徒を育てたいのかの幹を持ち、授業のねらい、到達目標、活動を考え、次につながるシラバスを各学校で創らないといけない。」「テストと授業、ゴールと評価をつなげることが重要である。指導者にとって一人一人の生徒は宝であると思ったときに子どもは感じ取り、汲み取り育つ。見つめる視線と共に考える視線の併用が大切で、全員と目がつながったら話すようにしている。」「人はやることによって学び、良くなりたいと思い、自己更新することによって成長する。」といったお話をいただいた。

金井先生は、「活動の中で評価することが大切なポイント。活動や目的が何かで評価が変わってくる。発表を楽しいものにしていくと生徒のアイデアも豊富になり、楽しみ、喜びを教えていけば活動レベルも上

がり、変わってくる。やりたい課題になっているか、次に生かせ、必然性があり、人のために何かをさせる課題になっていることが必要である。」「授業では目標やねらい、教師の思いをいかに実現するかを考え、自分に合ったものを身につけていくこと、自分らしさ(流)を出していくことが大切である。」と述べられた。

時間の制約があり全てのご質問にお答えいただくことは叶わなかったが、先生方の授業や生徒に対する思いや哲学が十分に伝わり、明日の授業に活かせる多くの示唆もいただけたことに感謝申し上げたい。

報告者: 泉恵美子 (京都教育大学)

KELES第12回セミナー (兵庫地区) ご案内

関西英語教育学会第11回セミナー(大阪地区)に引き続き、第12回セミナー(兵庫地区)が神戸市外国語大学にて開催されます。稲岡章代先生(姫路市立豊富中学校)と玉井健先生(神戸市外国語大学)を講師として、ワークショップならびに参加者の皆様から頂いた質問に回答する「ワークショップ質問箱」を行います。詳しくは、同封の案内状をご覧ください。

参加ご希望の方は、電子メール(件名:「兵庫地区セミナー申込」)にて、お名前、ご所属、会員・非会員の別を明記のうえ、kelesseminar@gmail.comまでお申込ください。定員になり次第締め切らせて頂きますことをお許しください。また、学会ホームページからも同様の案内状をご覧ください。

日時: 2008年10月13日(日・祝日) 13:00~17:00

受付: 12:30開始

場所: 神戸市外国語大学 三木記念会館
神戸市西区学園東町9丁目1

プログラム:

- ・ワークショップ(1) 13:05~14:35
稲岡章代先生(姫路市豊富中学校)
「コミュニケーション能力を育成する授業づくり」
- ・ワークショップ(2) 14:45~16:15
玉井 健先生(神戸市外国語大学)
「教師の成長のためのリフレクション - 始めの一步」
- ・ワークショップ質問箱 16:20~16:55
稲岡章代先生(姫路市豊富中学校)
玉井 健先生(神戸市外国語大学)
司会: 泉 恵美子先生(京都教育大学)
定員: およそ40名
費用: 会員無料、非会員500円
問合せ先: 京都教育大学 英文学科 泉恵美子
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地
電話: 075-644-8244 Fax: 075-645-1756
メール: emiko@kyokyo-u.ac.jp

セミナー担当幹事: 泉 恵美子

KELES第13回セミナー (京都・滋賀地区) ご案内

関西英語教育学会第13回セミナー(京都・滋賀地区)がキャンパスプラザ京都にて開催されます。衣笠知子先生(衣笠英語教室主宰)と直山木綿子先生(京都市教育委員会)を講師として、小学校英語活動を進めるためのワークショップを行います。また、久埜百合先生(中部学院大学)をお招きし、「小学校外国語活動必修化に向けて 子どもの学びと教師の支援」と題した講演を行います。詳しくは、同封の案内状をご覧ください。

参加ご希望の方は、電子メール(件名:「京都・滋賀地区セミナー申込」)にて、お名前、ご所属、会員・非会員の別を明記のうえ、kelesseminar@gmail.comまでお申込ください。申し込み受付は、11月4日(火)の午前9時からになりますので、ご注意ください。

日時: 2008年12月21日(日) 13:00~17:00

受付: 12:30開始

場所: キャンパスプラザ京都 第4講義室
京都市下京区西洞院通塩小路下る

プログラム:

- ・ワークショップ(1) 13:05~14:05
衣笠知子先生(衣笠英語教室主宰)
「発達段階に応じた具体的指導法: 歌や絵本の活用」
- ・ワークショップ(2) 14:15~15:15
直山木綿子先生(京都市教育委員会)
「『英語ノート』を活用した英語活動の授業提案 ~ 『英語ノート』の特色をとらえた授業の展開 ~」
- ・講演 15:25~16:55
久埜百合先生(中部学院大学)
「小学校外国語活動必修化に向けて 子どもの学びと教師の支援」
定員: およそ80名
費用: 会員無料、非会員500円
問合せ先: 京都教育大学 英文学科 泉恵美子
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地
電話: 075-644-8244 Fax: 075-645-1756
メール: emiko@kyokyo-u.ac.jp

今後のセミナーご案内

KELES第14回セミナー (奈良地区)

日程: 2009年1月24日(土)

KELES第15回セミナー (和歌山地区)

日程: 2009年3月14日(土)

第12回卒論修論研究発表セミナー

日程: 2009年2月14日(土)

日程は変更する場合があります。詳細は、次号以降のNewsletterおよび学会ホームページにてお知らせいたします。ご閲覧頂きますようお願いいたします。<http://keles.hp.infoseek.co.jp/>

全国英語教育学会理事会報告

- 第35回全国英語教育学会 鳥取研究大会
- ・会場: 鳥取大学湖山キャンパス 共通教育棟
 - ・日程: 2009年8月8日(土)・9日(日)
 - ・担当地区学会: 中国地区英語教育学会
 - ・研究発表申込締切: 2009年5月29日(金)
 - ・大会予稿集原稿締切: 2009年6月19日(金)
 - ・KELES担当企画: 課題研究フォーラム(2年目)
- 第36回全国英語教育学会 大阪研究大会
- ・会場: 関西大学(予定)
 - ・日程: 2010年8月7日(土)・8日(日)(予定)
 - ・担当地区学会: 関西英語教育学会
- 紀要 (ARELE) 第19号
- ・掲載論文: 27編(研究論文24編、実践報告3編)
 - ・学会賞: 石川慎一郎先生、石川有香先生
 - 論文タイトル: L2 Proficiency and Word Perception: An fMRI-based Study
- 紀要 (ARELE) 第20号
- ・申込締切: 2008年8月31日(日)
 - ・応募論文締切: 2008年10月31日(金)
 - ・審査結果通知: 2009年1月下旬
 - ・紀要第20号刊行: 2009年3月中旬
- 全国英語教育学会HPに「ARELE第20号執筆要領」、「執筆要領変更点と留意点」、「論文レイアウトサンプル【英文】」および「論文レイアウトサンプル【和文】」がWORDならびにPDF形式で掲載されています。 <http://www.jasele.org/>

新役員紹介

紀要編集委員会

紀要編集委員会の委員が選出され、下記の通り決定しました。任期は2009年度までの2年間となります。

- 委員長 横川博一(神戸大学)
- 委員 吉田晴世(大阪教育大学)
- 委員 藪内 智(京都精華大学)
- 委員 吉田真美(京都外国語大学)

学会誌『英語教育研究』(SELT)第32号

投稿論文募集のお知らせ

本学会誌第32号への論文投稿を下記の通り募集いたします。規定にしたがい、2008年度に開催された関西英語教育学会第12回研究大会および全国英語教育学会第34回東京大会での発表論文が優先されますが、これらの発表を経ない論文についても、一定の枠内で審査対象となります。会員の皆様の多数のご投稿をお待ちしております。

投稿受付期間

- ・2008年10月 1日 投稿受付開始
- ・2008年10月31日 投稿受付締切 22:00(厳守)

投稿にあたっての注意

- (1) 投稿要領を熟読して下さい。また、下記サイトにあるテンプレート(英語・日本語)を使用して、原稿を作成して下さい。
<http://keles.hp.infoseek.co.jp/kiyou.html>
 - (2) 論文投稿者は、編集委員長宛に、投稿論文を電子メールの添付ファイルとして送付して下さい。その際、メール本体に下記の情報を明記すること。
 - ・氏名
 - ・論文タイトル
 - ・論文内容の別(研究論文/実践報告)
 - ・所属(大学・学校名、大学院生の場合はその旨明記)
 - ・郵便番号および住所
 - ・電話番号
 - ・電子メールアドレス(連絡が取れるアドレスを記載して下さい)
- ・発表大会名(発表年月日)および発表題目
投稿先

- (1) 送付先
紀要編集委員会 横川博一(神戸大学)宛
yokokawa@kobe-u.ac.jp
- (2) 電子メールの件名(タイトル)は次のように記載して下さい。
SELT32投稿論文(氏名)
- (3) 投稿した日から2日以上経っても、編集委員会から受領確認のメールが届かない場合は、メールに問い合わせして下さい。
刊行までのスケジュール
下記のスケジュールは、多少前後する場合がありますので、あらかじめご承知おき下さい。
 - ・2008年11月30日 査読結果通知
 - ・2009年 1月31日 修正原稿締切
 - ・2009年 3月31日 刊行学会誌に関する問合せ先
本学会誌への投稿等に関するお問い合わせは、下記にお願いします。
紀要編集委員会 横川博一(神戸大学)
yokokawa@kobe-u.ac.jp

紀要編集委員会委員長: 横川博一

新入会員紹介 2008年4月19日から8月29日入金確認まで(敬称略)

表 昭浩	佐藤 香苗	武田 浄
今井 祥詠	本田 勝久	北川 真理子
戸田 マリア	二五 義博	森下 知美
宮田 優子	井上 亮	大和 知史
川上 典子	神原 克典	稲垣 宏行
井上 治美	伊藤 むつみ	角田 美環
梶 昌彦	河本 圭司	木澤 直子

丸山 華 棟安 都代子 中木場 めぐみ
西森 由美 佐藤 浩子 渋谷 順子
田原 志都可 田中 典子 太山 陽子
徳山 美穂 山本 宣生 安本 梓
横山 聡洋 リム チジャ 中村 嘉寛
高木 亜希子 山本 真美

今回のNewsletterに関西英語教育学会会員名簿(2008年9月1日現在)を同封しています。所属先の表記は、会員のご意志を尊重し、9月1日現在までの回答(空欄を含む)をそのまま記載させていただいております。ご了承下さいますよう、お願いいたします。

名簿担当幹事: 岩井千春

会費納入のお願い

年会費は以下の通りです。未納の方は納入をお願いいたします。同封の振込用紙をご利用下さい。

1. 一般会員(関西のみ) 5,000円
2. 一般会員(関西+全国) 7,000円

3. 学生会員(関西のみ) 3,000円
4. 学生会員(関西+全国) 5,000円

紀要DVD販売のお知らせ

待望の紀要DVDが刊行!

英語教育研究の全貌をPC画面に!

会員特別価格 3,000円

『英語教育研究』過去28年分、『卒論・修論研究発表セミナー発表論文集』過去9年分(いずれも2005年度刊行分まで)を全て電子化。鮮明な画像で論文を通読できるほか、OCRによるテキスト情報を埋め込みましたので、論文内の単語などでの検索も可能になりました。

会費納入および紀要DVD購入に関するお問合せは、会計担当 里井久輝[hsatoy@ilc.setsunan.ac.jp]までお願いいたします。

会計担当幹事: 里井久輝

KELES 第12回セミナー(兵庫地区)のご案内

日時: 2008年10月13日(月・祝日)13:00~17:00

場所: 神戸市外国語大学 神戸市西区学園東町9丁目1 三木記念会館

詳細は同封の案内をご覧ください。

KELES 第13回セミナー(京都・滋賀地区)のご案内

日時: 2008年12月21日(日)13:00~17:00

場所: キャンパスプラザ京都 第4講義室(JR京都駅ビル駐車場西側)

詳細は同封の案内をご覧ください。

最新情報が学会HPにて随時更新されますので、
頻繁に閲覧いただきますようお願いいたします。

<http://keles.hp.infoseek.co.jp/>